ずぶ濡れという感覚のなき海底にもうもうと湧く小魚を見る　　俵万智

リアリティが欠如しているような視界の表現がポイント。アクアラングをつけてのスクーバダイビングか、それとも海中や海底が見える窓のある船だろう。上句の印象では前者のように、下句の小魚とやや距離がある感じで後者のように読める。作者がスクーバダイビングを楽しんでいる話は聞いたことがないので、実際はグラスボートの取材なのだろう。

岩松院の天井にいる大鳳凰さみだれに咲く華のごとかり　　中西由起子

小布施の岩松院の有名な鳳凰図である。私はまだ見たことがないが、写真ではなかなかの迫力。強烈で印象的な色彩の比喩として、「さみだれに咲く華」として、動きをそえたところが手柄。

お好み焼きアフリカトロロ混ぜてみる深い根のこと考えながら　　石田郁男

「アフリカトロロ」とは何だろう。「トロロ」はとろろ芋だろうが、アフリカは産地なのか種類なのか。作者はフランスのリヨン在住。フランスの食品店で売っているトロロだから産地なのだろうと想像した。そう読むと、「深い根」はアフリカ大陸の地中深くあった意味。作者の思いを、読者が共有することができる点が魅力。

左右の手を僅かずらして打ちしのち人はわれより長く祈りつ　　水口奈津子

短歌の現在

No.389　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

神社で祈る場面。上句、表現が細部にわたっているから、すぐ隣にいて柏手を打つ人を見ている時間が読める。何を祈っているのか。私とはちがう何かだろうと、つい見てしまう感じ。人との関係のとらえ方に特色を見る。

どうしても膝の上から退かぬ猫猫越しに貼る黄色い付箋　　森屋めぐみ

猫好きの人の、のろけの歌と読んでいいだろう。「猫越しに貼る」に良質のユーモアが楽しめる。

防護服着たる人らが大熊の田に入り苗を植ゑけり去年は　　本田一弘

福島県大熊町は、福島原発のある町。昨年十二月まで町民の立ち入りが全面禁止されていた警戒区域だったという。どんな事情で去年の田植えがなされたのか。一応収穫してみて、稲の含む放射能値を測定したりしたのだろうか。まったく終わる気配のない原発事故の底深さを想像させる。今月は田植えの連作。どうしても作者はこの一首を入れておきたかったのだろう。

姑は逝き母も逝きたりほととぎす青葉木菟の声聞けば偲ばゆ　　白岩裕子

あの世に旅立った二人へのしみじみとした思い。ホトトギスはこの世とあの世を行き来する鳥として知られる。ともに初夏の鳥。思いと季節は関連しているのだろう。

海風に吹かれ店主と語り合う海と津波と虹と朝日を津波に流され、その後再建した仙台の釣具屋の店主と